『西南アジア研究』No. 90, 2020

ガンダーラの石製小皿と工人集団

Stone Trays from Gandhara and the Artisan Groups

岩　井　俊　平
Shumpei IWAI

Abstract　This paper aims to consider the artisan groups who produced small stone trays (so-called toilet trays) that have been excavated from various places in Greater Gandhara. As a result of analyzing the materials collected by H. P. Francfort and the investigation of materials existing in Japan by the author, it was found that the manufacturing methods of the stone trays can be divided into two groups : a method with lathe machining (called "a"), and a method without lathe machining (called "b"). Furthermore, there are five main ways to divide the inner surface of a tray into several compartments (labeled 1–5). It became clear that the two manufacturing methods and the ways of dividing are closely associated. That is, while "a1," "a2," "a5," "b3," "b4," and "b5" exist, "a3," "a4," "b1," and "b2" do not.

When we confirmed iconographies carved on the stone trays made by each group, it was found that some of them were adopted in the trays made by both groups. Therefore, it is highly possible that there were some groups who carved iconography apart from the artisan groups who made the stone trays. The excavation of the Sirkap site in Taxila indicates that both groups "a" and "b" were active in parallel as early as the second century BC or as late as the middle of the first century AD. Also in the latter half of the first century, stone trays were still popular among the Sirkap where "diaper masonry" was adopted for building some structures.

Considering the origin of both artisan groups, it is highly possible that group "a" was derived from an artisan group in India who had been making Buddhist reliquaries using the lathe machining since before the third century BC. On the other hand, it can be pointed out that group "b" may be related to an artisan group in Bactria who produced stone plates whose inner parts were divided in Ai Khanoum without using the lathe machining. Therefore, it is thought that in Greater Gandhara several artisan groups existed that had various forms of technical exchange during the period just before the appearance of Buddha images.

Keywords　Gandhara (ガンダーラ), Sirkap (シルカップ), Toilet Tray (化粧皿), Buddhist Reliquary (舎利容器)

は じ め に

いわゆる大ガンダーラ地域のタキシラ周辺やスワート周辺では，表面に様々なモチーフを彫りだした石製の円形小皿がしばしば出土する。また同様の小皿は，出土地不明のものも含め，世界各地の博物館および個人コレクションに分蔵されている。研究史上，「化粧皿」と呼称され，その年代と用途および図像の特徴について，これまで多くの研究がなされてきた。本稿は，この石製小皿の製作技法に注目し，その工人集団の系統と由来について考察する。

Ⅰ　石製小皿の研究史概略

石製小皿がもっとも多く出土したのは，1913 年に始まる J. マーシャルを隊長とするタキシラの発掘［Marshall 1951］においてである。特に表面に刻まれたギリシア神話を題材とした図像によって注目された。その後，S. R. ダール［Dar 1979，ダール（桑山訳）1981］および H. P. フランクフォール［Francfort 1979］によって既知の資料が集成され，その段階での総括的な研究が行われている。

これらの先駆的な研究によれば，石製小皿の年代はシルカップにおける出土状況から推測することが可能である。マーシャルの言う第Ⅴ層（インド・グリーク期）に出現し，継続的に第Ⅰ層（クシャーン期に相当する表土層）まで出土する。特に第Ⅲ層から第Ⅱ層（後期インド・サカ期～インド・パルティア期）に盛行するが，第Ⅰ層からはほとんど出土していない。マーシャルの年代観に従えば，前 200 年頃から後 1 世紀後半まで存続しており，もっとも盛行したのが前 1 世紀後半から後 1 世紀前半ということになろう。ただし，マーシャルが主張する各層の絶対年代については，変更の余地が十分に残されているため，厳密にこの時代で確定とすることはできない。この点については，Ⅳ章で触れる。

次に，彫刻される図像とその由来については，石製小皿が見出されて以来，細かな分析が行われてきた。マーシャルをはじめとして多くの研究者は，これらのモチーフをヘレニズム的，サカ的，パルティア的，インド的，といった表現で様式分類し，その由来を北西インド地域に進出したそれぞれの集団に求めた[1)]。一方で，こうした石製小皿と完全に一致する特徴を持った皿やその他の容器といった遺物は，これまでほとんど知られていないことから，その源流は不明確であり，基本的にはタキシラ周辺で創案されたものと考えられている[2)]。

そして，用途については，マーシャルが化粧用具と考えたことから「化粧皿（Toilet

1）　本稿では，こうした図像の主題と由来については基本的に取り扱わない。この分野における様式研究の流れと近年の成果については田辺勝美の各論考を参照されたい［田辺 1985 ; 2003 ; 2004］。

2）　その源流として，ローマ時代のエジプトで出土する石製の皿や，パルミラの石製円盤，ベグラーム遺宝の石膏円盤，グレコ・バクトリアの銀製円盤などがしばしば挙げられるが，いずれも直接的な源流とは考えにくい［Francfort 1979 : 91-93 ; ダール 1981 : 61-64 ; 田辺 2003 : 118-119］。

Tray)」の名称が定着している［Marshall 1951, vol. 2：493］。特に注意を引くのは，学術的な発掘によって出土した資料のほとんどが都市遺跡（特にシルカップ）からの出土で，仏教寺院などの宗教関連遺跡からはほとんど出土しないことである。したがって現在も，女性の化粧道具といった世俗的な用途を想定する研究がある［堀他 2006；堀・上山 2013］。一方でダールは，図像の中でディオニューソス神関連のモチーフが一定の割合を占めることから，そうした信仰に係わる儀礼用の道具である可能性を主張しており［ダール 1981：64–67］，宮治昭も同様に，石製小皿の図像は宗教的な意味を持っていると指摘している［宮治 1996：54–63］。フランクフォールは，こうした宗教的用途を否定したが［Francfort 1979：5–6］，石製小皿に認められる多様な図像が，クシャーン期になって様々な仏教彫刻へと受け継がれる点を指摘している［Francfort 1979：97–98］。

田辺勝美は，こうした一連の研究を総括し，石製小皿に関する新たな見解を発表している［田辺 2003；2004；2006；2007；2011；2015］。その研究によれば，石製小皿は都市に暮らす仏教徒が使用した何らかの儀礼用の道具であり，そこに彫刻されている図像は，いずれも死んだ仏教徒たちの魂を「彼岸」や「天」へと導く「魂の導師」として表されたのだという。そしてこのような伝統の中から，魂の導師としての仏像が初めて造られることになるという流れを想定している。さらにその図像のモデルとして，大ガンダーラ地域で出土したと推定されるテラコッタ製の凹型が存在したことを指摘した。

以上のとおり，石製小皿はこれまでその図像および用途を中心に検討され，バクトリアあるいはパルティア由来のヘレニズム文化と，引き続いて登場するガンダーラ仏教美術とを結びつけることのできる「ミッシング・リンク」と認識されているのである［Pons 2008；Lo Muzio 2013］。

しかし，仏教美術への橋渡しの役目が図像の内容から主張される一方で，石製小皿そのものの製作に携わった工人集団の存在についてはほとんど触れられてこなかった。製作技法について分析したフランクフォールも，分類の基準をあくまで図像においたため，製作方法の全体像や製作に携わった工人集団の系統に言及することはなかった。

そこで本稿では，まずはフランクフォールが分析した石製小皿を，改めて製作技法の観点から分類し，その特徴を明らかにする。さらに，一種の旋盤を用いて回転整形が行われる資料と，それが行われない資料の存在から，系統の異なる集団の関与を想定し，当該期の大ガンダーラにおける工人集団の動向を考察してみたい。

Ⅱ　石製小皿の分類

フランクフォールは，石製小皿を集成して丹念に考察する中で，その製作技法にも触れている［Francfort 1979］。彼が重視したのは，旋盤による回転整形が行われているかどうかであった。集成した 97 点の石製小皿をグループ A，B，C に分類し，A に属する資料はす

べて回転整形，Bに属する資料もそのほとんどが回転整形であるという。また，Cの中にも，一部に回転整形の資料が含まれている。ただし，彼の分類はこの整形方法に基づくものではなく，石材の種類，皿の内面の分割方法および蓮華文様の有無，そして特に図像の様式に関係しているため，製作集団のあり方が見えにくくなっているという問題がある。そこで本稿では，あくまで回転の有無によって二分した上で，それぞれの断面形や内面の分割方法などを確認していきたい[3)]。

分類に先立ち，全資料に共通する製作方法の概略を記す。

①原材料となる石材[4)]を適当な大きさ・厚さに割る。

②旋盤を用いた回転削りか，あるいはそれを用いずに円形に整形し，細部の調整を行う。

③表面（皿の内面になる側）を彫刻する。裏面（皿の底面側）に蓮華文を刻出する場合もあるが，どちらを先に行うかは判断できない[5)]。

まず，上記の②の工程で行われる作業にしたがって，石製小皿全体を二種に分類する。

整形方法 a（旋盤整形）：少なくとも側面から口縁部にかけて，旋盤を用いて回転整形するもの。口縁が外反する断面形態となる場合が多い（図 1-1，2）。底面も一旦は回転整形した可能性があるが，その痕跡は一切残っておらず，全面が平滑に磨かれて広い平底となるのが普通で，高台状の段が存在する場合もある。したがって，回転整形の痕跡は側面から口縁下部，そして表面の外縁部分にのみ認められる。

整形方法 b（旋盤を用いない整形）：旋盤を用いず，全体を円形に彫り出すもの。口縁部は，底面からそのまま立ち上がる形態となる場合が多い（図 1-3，4）。裏面は全体が磨かれる場合と，荒くノミの痕跡が残る場合とがあり，多くは丸底となるが，あまり一定していない。

3） 残念ながら，筆者はフランクフォールが扱った資料を実見していない。そのためこの分類は，あくまでその記述を全面的に信用してなされたものである。ただ，筆者はこれまで，個人コレクションに属する資料や，龍谷ミュージアムが所蔵する資料など，計 33 点の石製小皿を実見しているが，以下で示す分類基準から逸脱する資料は 1 点も存在しなかった。これらは，その由来や出土地が不明であるため，本稿では参考資料としての扱いに留めているものの，将来的には改めて報告したいと考えている。なお，注 7）も参照。

4） ガンダーラ地域の彫刻で使用される石材については，D. R. C. ケンペによる科学的分析などが知られている［Kempe 1986］。しかし，本稿で扱う資料群を直接調査した事例は存在しないため，慣例的に用いられている名称（片岩，凍石，蛇紋岩など）を，フランクフォールの記述に基づいて使用した。

5） 以上の諸工程に関して，工房跡が発見されていない現状では，どの段階までが採石場の近傍で行われ［Olivieri 2000］，どの段階から製作途中品（あるいは製品）が「流通」するのかは判断できない。マーシャルも，タキシラで出土する片岩や凍石などが搬入品であることをしばしば指摘するが［Marshall 1951, vol. 2 : 481 ; 691-693］，どのような形態で石材が搬入されたのかについては，その記述からは判然としない。後述するように，②の工程に少なくとも二つの系統が存在し，それぞれの石材に違いがないことを考慮すれば，①のみが採石場の近傍で行われ，小型にした石材を流通させていた可能性が高いのではないだろうか。

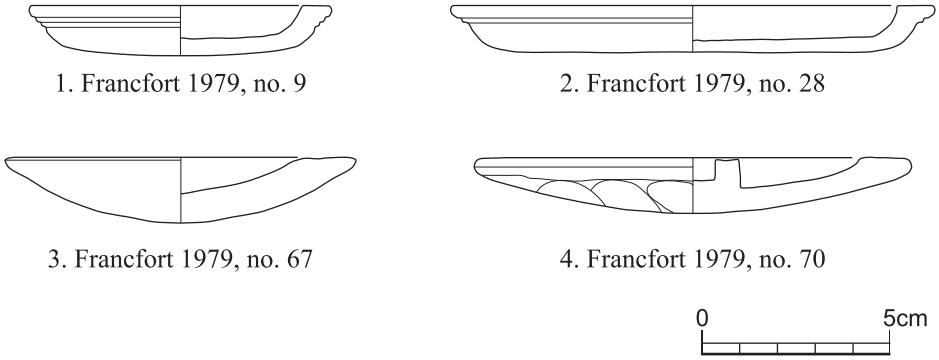


図 1　石製小皿の断面図

なお，旋盤を用いる際に皿を回転中心軸で固定する正確な方法などの技術的な細部は不明であるが，整形方法 a に属する資料の底面にしばしば認められる，長方形のくぼみがその痕跡である可能性が高い（図 2）。同じくぼみは，後述する舎利容器の底面にも認められる場合があり［Rienjang 2016］，両者の製作技法の共通性を物語るものとして興味深い。

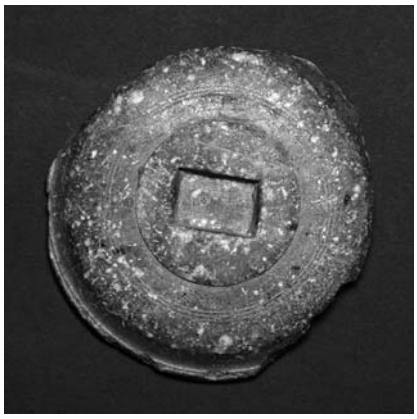


図 2　石製小皿の底面に認められるくぼみ

次に，上記の③の工程で行われる作業のうち，皿の内面を分割する方法にしたがって，全体を五種に分類する（図 3）。ただし，この五種のどれにも含まれない特殊な分割方法もいくつか存在するため，そうした資料についてはここに含んでいない。

分割方法 1：分割せず，図像の彫刻のみを施すもの（図 3-1）。

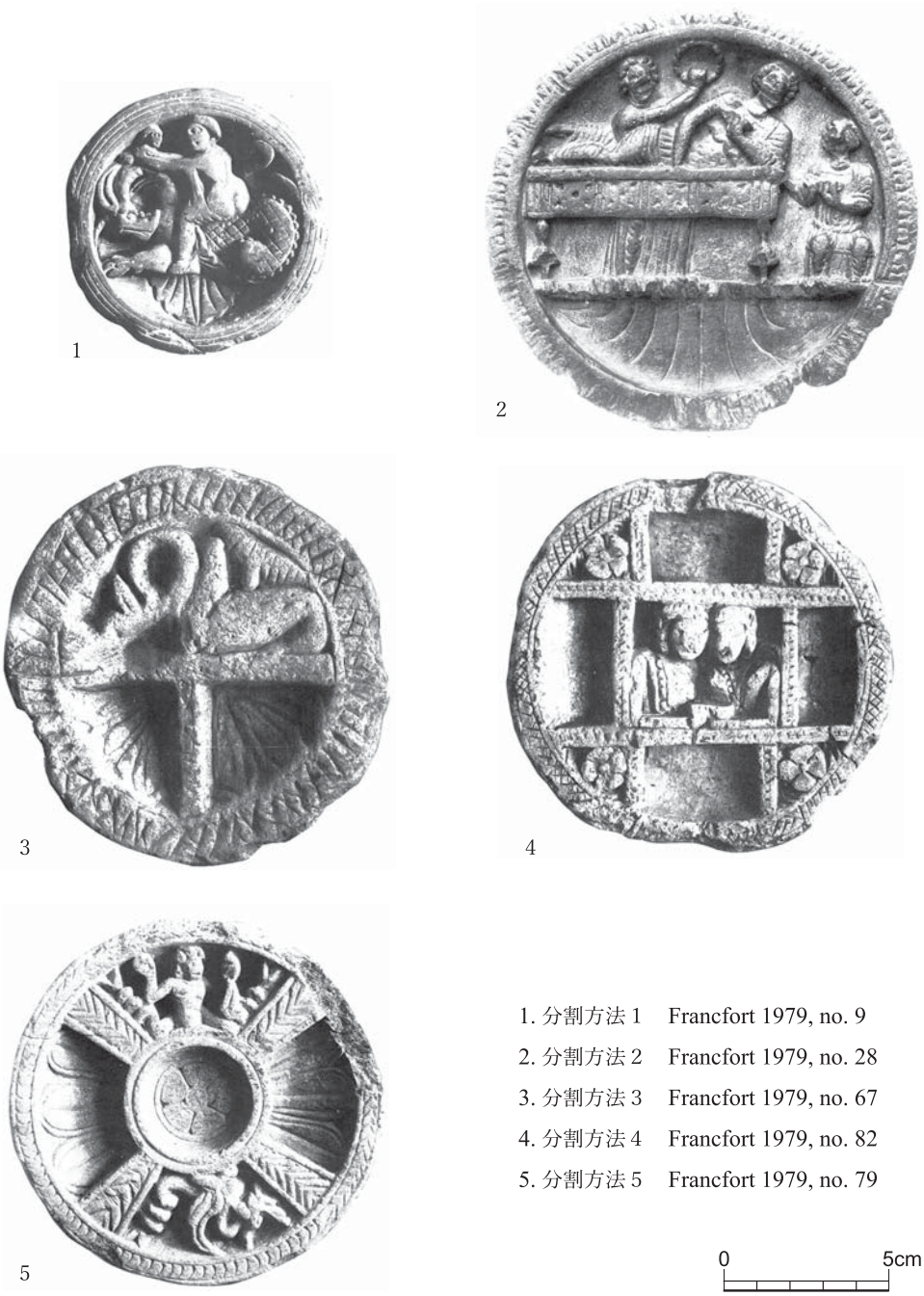
分割方法 2：水平方向の圏帯によって 2 分割するもの（図 3-2）。

分割方法 3：水平方向の圏帯によって 2 分割し，その下部区画を垂直方向の圏帯によって 2 分割して，計 3 分割とするもの（図 3-3）。

分割方法 4：水平方向の圏帯によって 3 分割し，その各区画を垂直方向の圏帯によってそれぞれ 3 分割して，計 9 分割とするもの（図 3-4）。

分割方法 5：中央に円形の区画を設け，その周囲を囲むように分割するもの（図 3-5）。

上記の 2 つの基準に基づく分類を組み合わせ，例えば整形方法が a で分割方法が 1 の資料を「a1 型式」などと記述することとする。フランクフォールが集成した資料のうち，整形方法が明記してある例をこの方法によって検討すると，実は分割方法の 1 と 2 は必ず整形方



1. 分割方法 1　Francfort 1979, no. 9
2. 分割方法 2　Francfort 1979, no. 28
3. 分割方法 3　Francfort 1979, no. 67
4. 分割方法 4　Francfort 1979, no. 82
5. 分割方法 5　Francfort 1979, no. 79

図 3　石製小皿の分割方法

法 a と組み合い，分割方法 3 と 4 は必ず整形方法 b と組み合うことがわかる。すなわち，a1 と a2 という型式は存在するが，a3 と a4 という型式は現状では皆無なのである。同様に，b3 と b4 は存在するが，b1 と b2 は皆無である。

以上の組み合わせには，当然のことながら若干の例外があることが予想される。1〜5 以外の特殊な分割方法もこの例外ということになろう[6]。しかし，フランクフォールが集成し，整形方法も明記している資料に関しては 1 点も例外がなく，筆者がこれまで実見した国内個人コレクション等の資料にも一切の例外はなかったことから，整形方法と分割方法がかなり強固に結びついていることは間違いない[7]。分割方法 5 については，フランクフォール集成の資料では a のみと組み合っているものの，個人コレクション等の中には，b と組み合う資料が 3 点含まれていた。したがって，分割方法 5 は a・b 双方の整形方法と組み合い，後に触れるタキシラのシルカップでの出土状況を見ても，第Ⅱ層からのみの出土であるため，分割方法 1〜4 に比べて，やや遅れて登場する可能性が高い。

このようにして，石製小皿は a1，a2，a5，b3，b4，b5 の各型式と，これらに含まれないごく少数の例外資料とに分類されることとなる。分割方法 1〜4 については，整形方法との対応が明らかであるため，本稿では，フランクフォール集成資料のうち，製作技法について明確な記述のない資料についても，この分割方法に従って各型式に割り当てた[8]。

Ⅲ　工人集団の系統と図像との関係

前章で行った分類により，旋盤加工の有無と内面の分割方法が排他的に結びつくことが判明し，石製小皿を製作する工人集団を大きく 2 系統に分けることが可能となった。以下では，旋盤を持つ集団を a，持たない集団を b と呼称する。この系統は，あくまで外形の整形と内面の分割に係わる分類であり，石材や図像モチーフに基づいたものではない。そこで本章では，分類基準に用いなかった要素である石材の種類や図像モチーフなどが，工人集団の系統とどのように関係するのかを，フランクフォール集成によって確認しておきたい。

まず石材との関係を確認しよう。集団 a に分類可能な資料のうち，石材が明記されている

6）　特に重要なのは，分割方法 4 と 5 を組み合わせたような事例である［田辺 1985 : 25-26］。筆者が実見した資料の中にも 1 点含まれており，中央の円形部分と裏面の口縁付近は明瞭な回転整形痕が認められる。後で触れる集団 a と集団 b が融合した結果として製作されたとも考えられ，非常に興味深いものの，学術的な発掘での出土例が皆無であるため，本稿では積極的に取り上げなかった。

7）　筆者が実見した資料における内訳は，以下のとおりである。a1：3 点，a2：6 点，b3：11 点，b4：5 点，a5：3 点，b5：3 点，特殊な分割：2 点。

8）　さらなる資料調査によって，a3 や b1 といった資料が出現する可能性は否定できない。フランクフォール集成の各資料も同様であろう。しかしながら，整形方法と分割方法の組み合わせが明らかな資料の中に一点の例外も存在しないことを本稿では重視して，分割方法にしたがって諸型式へ割り当てた。今後，より多くの資料を実見する中で確認をしていかなければならない。

のは 53 点で，凍石が 18 点，蛇紋岩が 4 点，片岩が 31 点である。一方，集団 b に分類可能な資料のうち，石材が明記されているのは 25 点で，凍石が 6 点，片岩が 19 点である。凍石・蛇紋岩は，片岩にくらべて軟質で，削り加工に向いた石材である。当時の旋盤の構造と，それがどの程度の回転力を持っていたかはまったく見当がつかないが，集団 a が旋盤加工に向いた軟質の石材を意識的に選択している可能性が数値の上からは認められる。しかし，必ずしも対応関係が一致していないことも明らかである。

次に，図像との関係を確認する。まず，基本的に集団 a の製品に彫刻される（a1 と a2 にまたがっている）のは，(1) ギリシア神話のテーマや接吻・性愛などヘレニズム的な図像，(2) ディオニューソス信仰に関連すると思われる複数人の宴会の場面，(3) ケートスに乗るネーレーイス，(4) ケートスなどの海獣に乗る人物の図像などが多い。(1) と (2) は，フランクフォールがグループ A と呼んだものと対応し，上記した凍石製の資料 18 点のうち，11 点はこうした図像が彫刻されている。さらに，(5) 寝台に寝そべる人物を複数の人物が囲むいわゆる「饗宴」場面については，すべての資料が a2 型式に属している。

集団 b の製品に彫刻される（これも，基本的には b3 と b4 にまたがっている）のは，(6) 2 名の人物（主に男女のカップル）が杯を手に並ぶ図像，(7) 単独の海獣・怪獣・動物図像などが多い。また，(8) 仏教図像，についても 2 点のみ知られている。集団 b の製品は，フランクフォールがグループ C または AC と呼んだものにすべて含まれている。

表面の図像以外に，裏面に彫刻が施されている場合がある。そのほとんどは開蓮華文であり，フランクフォールがその存在を指摘している資料に関しては，ほぼすべて集団 b の製品である。例外は，2 点のみであった[9)]。

このように，外形の整形を行う工人集団の系統と彫刻される図像にも，基本となる対応関係は存在していることがわかる。しかし問題は，非常に多くの類例が知られるケートスなどの海獣・動物を単独で表現した資料で，これらは多くが集団 b に属するものの，集団 a でもしばしば採用されており，系統を越境しているのである。このような越境は，複数の人物を表現する図像などにも認められる。これまでは，ここで取り上げた石材や図像のような，必ずしも一定の属性と対応しない指標を分類の基準に置いていたため，集団の抽出が困難だったのだろう。

整形を行う工人集団の系統と図像のモチーフが完全には対応しないことについては，複数の解釈がありえる。集団の中に図像彫刻も行う専門家がいる場合と，外部の彫刻専門家集団（あるいは個人）と協力する場合とがあったのかもしれない。また，使用者側には図像のモチーフに関する要求や好みが厳然と存在しており，各製作集団がその要望に応えるためにそれぞれ工夫をしていた可能性も考えられよう。この点についてはⅤ章で再び触れることにしたい。

9）　フランクフォールの記述に従えば，a1 に 1 点，a2 に 1 点，裏面に線刻の蓮華文が施された資料が存在した。なお，この対応関係は国内個人コレクション等でもまったく同様であった。筆者が実見したうち，裏面に蓮華文を刻む資料は，33 点中 17 点であり，すべて集団 b に属する。

Ⅳ　タキシラにおける出土状況

石製小皿がまとまって出土した唯一の遺跡は，タキシラの都市遺跡であるシルカップである。本章では，ここまでで確認した2系統の工人集団による製品が，シルカップにおいてどのように出土したのかを確認し，その年代と出土地点の傾向から両集団の活動のあり方を考察してみたい。

シルカップ遺跡の発掘において，石製小皿は33点出土しており，マーシャルがインド・グリーク期と考えている第Ⅴ層から，クシャーン期とされる第Ⅰ層までに及ぶ。特に第Ⅲ層（後期インド・サカ期）と第Ⅱ層（インド・パルティア期）からは22点が出土していてもっとも量が多く，第Ⅰ層からは4点のみの出土である。ダールはこの状況を紹介しつつ，これらの石製小皿が前2世紀に出現し，後1世紀前半のインド・パルティア期にもっとも盛行して，1世紀後半のクシャーン期にはほとんど姿を消すという年代観を提示した［ダール 1981 : 59-60］。

しかしこの年代観は，マーシャルのシルカップ編年に依っているという問題がある。マーシャルは，シルカップの発掘において第Ⅶ層（プレ・グリーク期）から第Ⅰ層（クシャーン期）までの層位を確認し［Marshall 1951, vol. 1 : 118］，その絶対年代についても報告書の各所で言及しているが，その年代観を無条件で受け入れることはできない［Ghosh 1948 ; 桑山 1987 : 228-232 ; 2003 ; Erdosy 1990 ; Behrendt 2004］。また，マーシャルの発掘でもっとも広い範囲が調査されたのが，この第Ⅲ層から第Ⅱ層であり，第Ⅰ層については「クシャーン征服（後60年頃）後に比定され，いくつかの部分的な遺構しかない」［Marshall 1951, vol. 1 : 118］という。この状況では，第Ⅲ層から第Ⅱ層での出土量が多いのは当然の結果で，単純に他の層の出土量と比較することはできない。

さらにマーシャルは，第Ⅲ～Ⅱ層をインド・サカ後期からインド・パルティア期（前50年頃から後60年頃まで？）に比定するが，両層を明確に分けることはできないとも述べている［Marshall 1951, vol. 1 : 139］。そのうえ，この両層における貨幣の出土状況を確認すると，もっとも多く出土しているのはインド・サカのアゼス2世貨でも，インド・パルティアのゴンドファーレス貨でもなく，実はクシャーンのクジュラ・カドフィセス貨であり，しかもその総数は2000枚を超えている［Marshall 1951, vol. 2 : 785-793］。この状況で，第Ⅱ層がインド・パルティアまでで，クシャーンは第Ⅰ層のみだとは到底言えないはずである[10]。

10）明確にクジュラ・カドフィセスの名前が刻印された銅貨だけでも1975枚に及び，第Ⅰ層で262枚，第Ⅱ・Ⅲ層を合わせて1684枚，そしてⅣ層以下でも29枚が出土している。一方で，第Ⅱ・Ⅲ層において，年代的に遡るインド・サカのアゼス2世貨幣は1051枚，インド・パルティアのゴンドファーレス貨幣は630枚の出土である。このことから，遅くとも第Ⅱ層の段階では，すでにクシャーン朝期に入っていることは確実である。なお，シルカップおよびダルマラージカー寺院において発見されたストゥーパ内の一括資料において，これらの貨幣がどのように共伴しているかについては桑山の論考［2003］を参照。

したがって，第Ⅲ層から第Ⅰ層までを，広く前1世紀頃から後2世紀前半頃の250年間ほどと見るしかないのが現状である[11]。

以上の点を踏まえて，石製小皿の出土層位を確認すると，インド・グリーク期とされている第Ⅴ層からa2型式の資料が1点出土しており（報告書の石製品番号は63，以下同じ），第Ⅳ層においては，a1が1点（62）[12]，a2が2点（82，83），b3が1点（84），b4が2点（78，79）出土している。したがって，早ければ前2世紀頃（マーシャル編年），遅くとも前1世紀の半ば頃（ゴーシュ編年など）には，集団aと集団bが並行して活動しているのである。マーシャルの発掘においては，第Ⅴ層以下が非常に限られた面積しか調査されていないことを考えると，どちらの集団が早いとは言いにくいが，一応現状では，集団aが若干早く活動を開始していることになる。しかしいずれにしろ，両系統がそれほど時期を違えずに活動していた可能性が高い。

次にシルカップにおける石製小皿の出土位置を確認しよう（図4）。図中の範囲内で出土している29点の状況を確認する限りにおいては，集団aと集団bが製作した資料に，出土位置の違いは認められない。各々の資料が都市内から広く出土しており，石製小皿の製作の場と消費の場が関連していないことを示している。ダールは，ストゥーパが所在する区画に出土が集中すると指摘しているが［ダール 1981 : 65］，いずれもストゥーパのごく近傍とは言えないことがわかる［堀他 2006 : 33］。

ただし，ひとつ興味深いのは，第Ⅳ～Ⅰ層から出土した資料のほとんどが，なぜか大通り（図中に“Main Street”と表記されている部分）の西側，それも通りから30メートル以上離れた場所で出土するという点である[13]。特に，E’区とF’区からの出土が多い。第Ⅲ～Ⅱ層については，出土位置がわかる20点中，16点が西側からの出土で，他の遺物がシルカップの全域から万遍なく出土していることに比べると，石製小皿の出土状況は特異に感じられる[14]。

11）　さらに第Ⅰ層に関しては，部分的な遺構しか存在しないということであれば，都市廃絶後にごく一部が一時的に使用されただけの可能性もあり，その出土品をそもそも第Ⅱ層までの出土品と連続するものと捉えることはできない可能性もある。以下の議論では，第Ⅰ層についても適宜触れていくが，このように取扱いの難しい資料であることは念頭に置く必要があろう。

12）　この資料に関して，マーシャル報告に混乱があることについてはダールが注意を喚起している［ダール 1981 : 注 17］。仮に第Ⅴ層出土であっても，本稿の主張とはまったく矛盾しないが，ここでは1951年の最終報告にしたがって第Ⅳ層出土としておく。

13）　ただし，Ⅴ層以下は，大通りの東側を発掘していないため，出土遺物のほとんどは北西側となる。

14）　実は，これとよく似た出土状況を示すのが，後で詳しく触れる石製舎利容器である。基本的にはダルマラージカーやカーラワーンといった近隣の仏教遺跡から出土する石製舎利容器は，都市遺跡であるシルカップの街区（ストゥーパ以外の場所）からも7点出土しているが，そのうち6点は大通りの西側に集中している。これらがどのように使用されていたのかは不明だが，ストゥーパに埋納する舎利容器としての用途以外に，何らかの一般的な使用方法があったのだろう［Jongeward et al. 2012 : 46］。

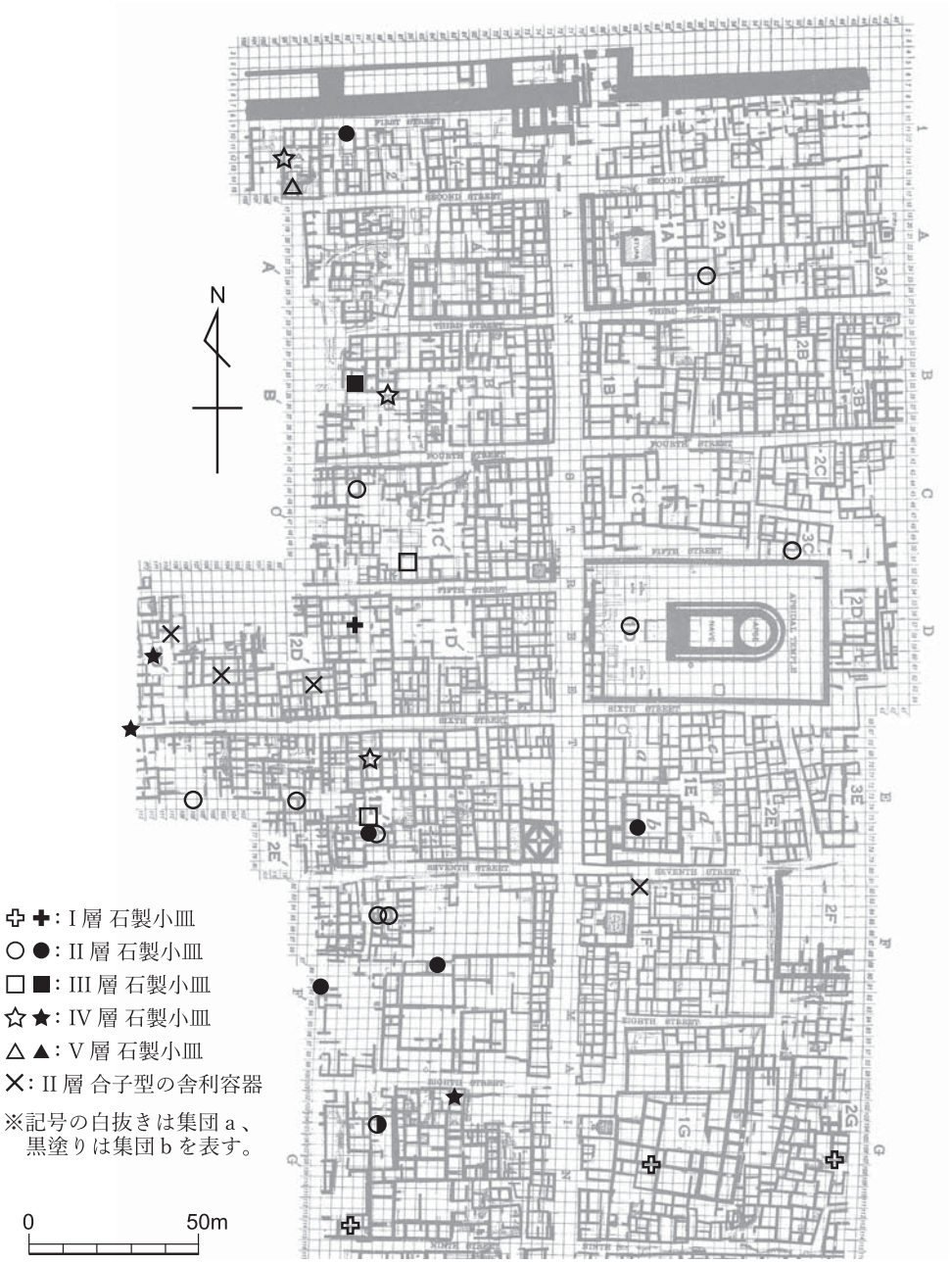


図 4　シルカップ遺跡における石製小皿の出土位置

このような分布のあり方と関連するのが，シルカップにおいてもっとも新しい建築にのみ使用される，「ダイアパー積み」という石積み方法によって構築された建造物の分布である。シルカップにおけるダイアパー積み建築は非常に限られており，D 区のいわゆるアプシダル寺院や，E' 区の菱型構造を持つストゥーパ基壇，C' 区のストゥーパのほか，E' 区や F' 区

には，部分的にこの石積みが認められる［Marshall 1951, vol. 1 : 181-186 ; 桑山 2003 : 14］。すなわち，石製小皿の分布と重なっているのである。マーシャルは，この地域に大地震が起こった後のインド・パルティアによる再建期にダイアパー積みが採用されたと指摘し，この工法の開始を第Ⅱ層の西暦後 30 年頃に割り当てていた［Marshall 1951, vol. 1 : 118 ; 137］。一方で桑山は，初期ダイアパー建築にアゼス 2 世貨幣とクジュラ・カドフィセス貨幣が関連していることなどから，後 70 年代以前に割り当てた［桑山 2003 : 10-11］。第Ⅱ層から大量に出土するクジュラ貨幣の存在から考えれば，後者の年代がより正確であるように思われ，ダイアパー積みの出現を仮に後 50～70 年頃と置くことができよう。

先述したとおり，シルカップの層位関係は今となっては正確に把握することが難しく，マーシャル本人が述べるように第Ⅲ層と第Ⅱ層の間も明確には分けがたい。この点から，特に第Ⅲ～Ⅰ層の出土品を区別することには危険を伴う。そうであるなら，ごく大雑把に言って，第Ⅲ～Ⅰ層出土とされる石製小皿が，マーシャルの言う「地震後」の建物に係わっている可能性があるということである。第Ⅲ～Ⅰ層のある時期以降（地震後？），シルカップの大通りに面した地点は，初期ダイアパー積みの建築を含む宗教施設が林立しており，あたかも宗教都市であるかのような様相を呈していた。桑山は，この時期のシルカップが一般的な都市としては機能していなかった可能性にすら言及している［桑山 2003 : 14-15］。もちろん，廃墟になっていたとまでは断言できないが，かつての都市（地震が本当にあったとすれば，それ以前）と比較して，限定的な地域にしか人が暮らしていなかった可能性は高い。そうした人々の間では，大通り沿いの宗教施設が大きな意味を持っていただろう。したがって，少なくとも第Ⅲ～Ⅰ層における石製小皿の出土状況は，この遺物が当時の宗教建築およびそれに関連してシルカップに暮らす人々と密接に関係していることを示しているのである。

ここで本章の内容をまとめれば，以下のようになろう。

まず，シルカップ遺跡の出土状況からは，工人集団 a と b が，石製小皿が登場した早い段階からどちらも活動しており，製品を都市に供給していたことが判明する。また，両集団が供給する石製小皿の量に大きな差がないことも確認できる。

そして，第Ⅲ～Ⅰ層から出土した石製小皿の多くがダイアパー積みの導入時期（後 50～70 年頃？）に関連するとすれば，この方法で建造された宗教建築あるいはその近傍で暮らすシルカップの住民との関係が深いことがわかり，ある時期以降の石製小皿が，単なる世俗的な用途に供されるものではなく，宗教的・儀礼的な意味を持っていた可能性が高くなるのである[15]。

15） 大通りに並ぶストゥーパ等の施設は，その多くが仏教に関連するものと考えられている。その場合，石製小皿は仏教徒と密接に関係することになる。しかし，この時期は近郊のダルマラージカー仏寺が大いに繁栄しており，わざわざシルカップに仏塔を建築する理由が不明である。桑山が指摘するように，これらの施設の中には，仏教の流行によって押し出される形となったジャイナ教などの宗教建築が含まれている可能性も否定できない［桑山 2003 : 15］。

V　工人集団の由来

前章において，集団 a と集団 b がそれほど時期を違えずに並行して活動を開始していることを確認した。実はこの点は，これまでの多くの見解と異なっている［Francfort 1979 : 97–98 ; ダール 1981 : 59–60 ; 田辺 2003 : 104–105］。

これまでの研究では，集団 a と密接に関連するヘレニズム的なモチーフを，グレコ・バクトリアの文化に由来する，より時代の遡る資料と考える傾向があった。確かに，集団 a の製品に彫刻される図像には，集団 b が採用する図像に比べて表現が自然で写実的なものが多く，仮に彫刻の優劣をそのまま時間差に置き換えるのであれば，集団 a の製品を，より古いインド・グリークの時代に位置づけることができるかもしれない。しかし，Ⅲ章で確認したように，それぞれの集団が採用する図像には系統の違いがある程度存在し，写実的表現のものが徐々に退化するという一系統的な変化を辿るわけではない。この点は，シルカップにおける出土状況が両者の並行した活動を示していることと矛盾しない。

そして実は，本稿で検討した製作技法からも，集団 a がグレコ・バクトリアとは直接には関係しない可能性を指摘することができるのである。グレコ・バクトリアにおける都市文化を検討できるのはアイ・ハヌム遺跡をおいてほかにはないが，ここから出土した石製品を報告する中で，フランクフォール自身が，旋盤加工が施された資料はほぼ皆無であることを指摘しているのである［Francfort 1976 : 91］。

ここで，アイ・ハヌムで出土する特徴的な片岩製容器を確認しよう（図 5）。そもそも，石灰岩が豊富に産出するバクトリア地域にあって，アイ・ハヌム遺跡出土の石製品の多くはこの石灰岩（大理石と表記される場合もある）を素材としている。その中で，これら片岩製の製品は，わざわざ遠方から搬入した石材で作られたものである［Francfort 1976 : 91］。本稿で扱う石製小皿と関連が認められそうな形態の資料として，一連の石製皿が存在し（図 5–1・2），直径はガンダーラのものより大きいものの，断面形は集団 b の製品と酷似している資料も存在していることがわかる。さらに，象嵌を施された蓋を伴う石製合子も重要である（図 5–3～5）。身の内部が複数に分割され，特に中心に円形のくぼみを設けるものは，石製小皿の分割方法 5 にも共通する特徴である。これらはいずれも，旋盤加工を行わずに製作されており［Rienjang 2016 : 96］，工人集団 a との関係は薄いと判断できる。

それでは，集団 a が身に付けている旋盤加工の技術はどこに由来するのであろうか。タキシラにおける他の出土遺物を概観したとき，同じように旋盤加工を施した遺物が出土していることに気づく。壺や皿，ゴブレットといった容器の中で，特に出土数が多く注目すべきは石製舎利容器である。これは仏舎利（に見立てた骨片や灰，金・銀・銅製品，貴石など）を中に入れて，ストゥーパに封入するための合子で，タキシラのほか，スワートなどの大ガンダーラ各地域において多くの出土例が知られている［Jongeward et al. 2012］。その来歴を遡れば，すでに北インドのウッタル・プラデーシュ州に所在するピプラーワー遺跡で出土した

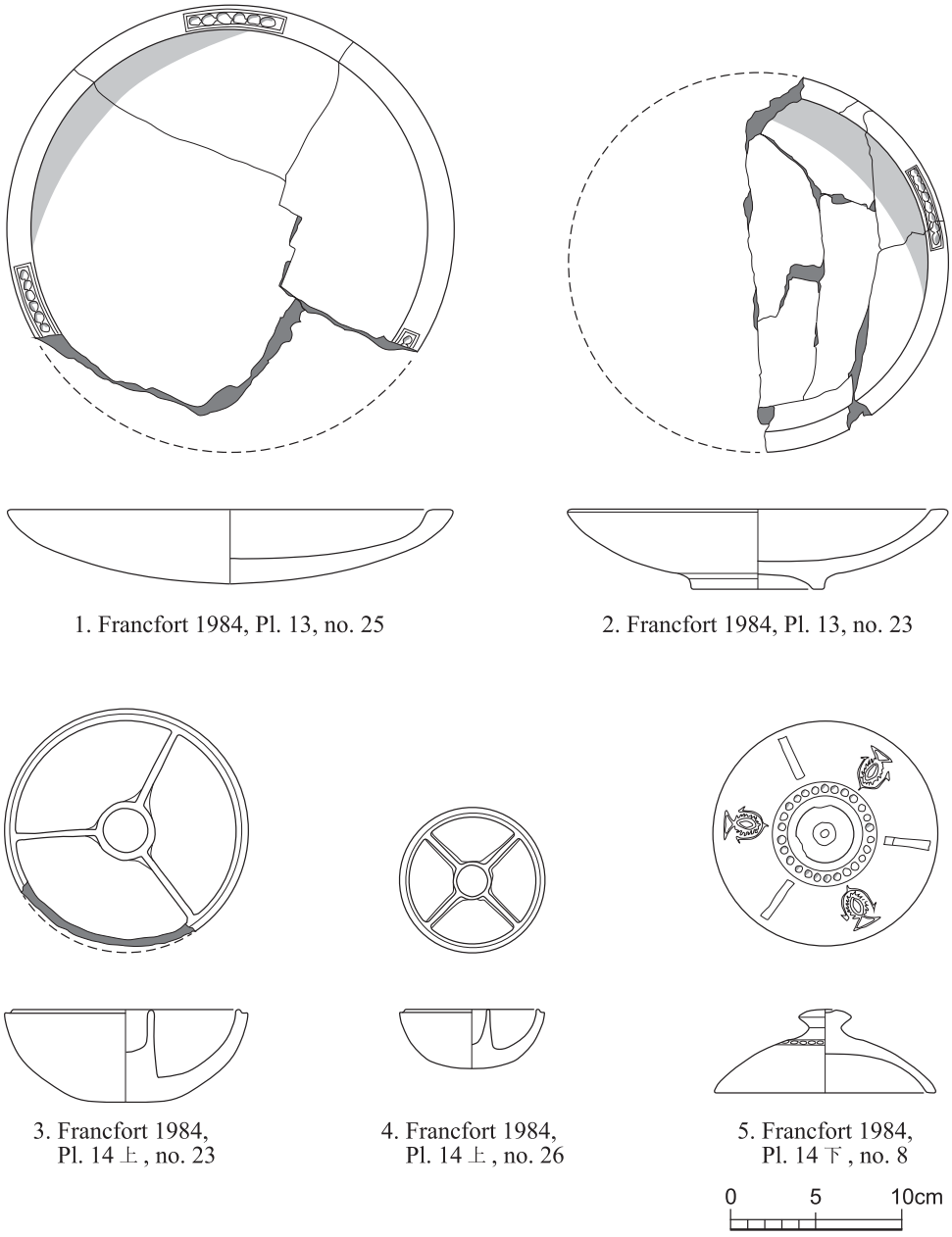


図 5　アイ・ハヌム遺跡出土の片岩製容器

複数の舎利容器[16] にこの技法が認められ［中村編 2000 : 87］，マディヤ・プラデーシュ州の

16）　ピプラーワー遺跡出土の舎利容器のひとつは，「釈迦族の尊者の舎利」と読める銘文が刻まれていることで知られ，それが実際にシャカムニその人にかかわるものなのかどうかやその年代についてなど，多くの議論がある［杉本 1984 : 344–358］。しかし，前 3 世紀頃よりも新しく考える意↗

サーンチー遺跡から出土した前2世紀頃の多くの舎利容器にも，明確に旋盤加工が施されていることを確認できる。

タキシラにおいては，ダルマラージカーやカーラワーンといった仏教寺院からはもとより，都市遺跡であるシルカップ遺跡からも，宗教施設とは関係なくこの石製舎利容器が複数出土している（図4）。したがって，その地理的な近さを考慮すれば，石製小皿を製作する集団aが保有する旋盤技術は，石製舎利容器などを製作していた集団の技術と密接に関係していた可能性が高い。このことを具体的に示すのが，Ⅱ章で触れた，舎利容器底面の長方形のくぼみである。使用する石材が凍石や片岩であるという共通性も合わせて考えると，石材の入手から石製小皿の外形の仕上げの段階までは，舎利容器と同じ工人集団が担っていた可能性すら存在するのである。

以上のように，集団aが仏教教団にも製品を供給していたインドの工人集団に由来する可能性が明らかとなった。また，アイ・ハヌム遺跡から出土する，旋盤を使用せずに加工された片岩製の皿の中に，集団bが製作した石製小皿と断面形が酷似する例が存在すことから，集団bについてはアイ・ハヌム起源の石製品工人集団に由来する可能性を指摘できる[17]。もしそうであれば，これまでは時期的に遅れると考えられてきた，単独の動物図像や退化した人物像を主として採用する集団bが，グレコ・バクトリアを代表するアイ・ハヌム遺跡に由来するということになるのである。さらにフランクフォールによれば，退化した動物や，カップルが杯を手にして並ぶ図像は「インド系」とされており［Francfort 1979 : 85–86］，それが正しいとすると，皿の製作技法と図像の対応関係は完全に逆ということになる。Ⅲ章で述べたとおり，皿の外形を整形する工人と，内面の図像を彫刻する専門家集団（あるいは個人）が同じであるかどうかは判断できないが，技術の由来と，主として採用される図像の系譜が一致していないこのような状況は，両者がもともとは別の集団であったことを示唆する。実際のところ，アイ・ハヌムで出土する片岩製品では，合子の蓋に植物文様や馬などが線刻で刻まれる以外，装飾としては象嵌を含めた幾何学文様が認められるのみであり，石製小皿に見られるような人物像などは彫刻されていない。したがって，集団bがアイ・ハヌムの片岩製品を作っていた工人の系譜を引くとすると，彼らは人物などを彫刻する技術を所有していなかったと考えられるのである。逆に，アイ・ハヌムで認められる細かな象嵌技法が，大ガンダーラの石製小皿に施された事例も皆無である[18]。

↘ 見はなく，遅くともこの頃には旋盤加工の技術が確立していた可能性が高い。

17） 集団bの由来については，今後のさらなる検証が必要である。註18）も参照。

18） なお，アイ・ハヌムで出土する石製合子と非常によく似た内面分割を行う舎利容器が，特にアフガニスタンで多く出土している［Rienjang 2016］。これらは底部に長方形のくぼみを持っていて，明らかに旋盤を用いて加工されており，技術の融合が認められる点で興味深い。こうした舎利容器と本稿で扱った石製小皿の関係については，稿を改めたい。

この点は，集団ａに関しても同様である。インド由来の旋盤加工技術を保持する彼らが，当初からヘレニズム的な図像を彫刻する技術をも保有していたはずはなく，彫刻家集団との共同で，そうした図像を主として採用した石製小皿を製作したのだろう。大ガンダーラ周辺で出土したとされるテラコッタ製の凹型［田辺 2015］は，こうした集団によって利用されていたのかもしれない。

お わ り に

ここまで，西暦紀元前後，大ガンダーラにおいて使用された石製小皿の分類と，その製作に携わった工人集団の抽出，タキシラにおける出土状況，そして工人集団の由来について確認した。それを簡単にまとめるならば，次のようになろう。

まずタキシラでは，早ければ前２世紀，遅くとも前１世紀には石製小皿が登場していた。現状で最も下層から出土しているのは a2 型式である。そして前１世紀の半ばまでには，旋盤加工技術を持つ集団ａと，旋盤を持たない集団ｂの２系統の工人集団が存在し，それぞれが石製小皿を供給していた。周辺地域での出土品から考えると，集団ａは舎利容器などを旋盤で製作していたインドの工人集団に，集団ｂはアイ・ハヌム遺跡で石製の合子や皿を製作していたバクトリアの工人集団に由来する可能性が指摘できる。また，それぞれの製品に図像の彫刻を施す集団が当初は別に存在していたと考えられる。そしてタキシラにおいては，後１世紀後半頃まではａ・ｂ両集団が併存する一方で，第Ⅱ層以降では，両集団がともに分割方法５を採用する可能性がある。これは，２つの集団が融合していく傾向を示しているのかもしれない。

このように，当該時期の大ガンダーラには複数系統の石製品の工人集団が存在しており，図像を担当する集団を含め，さまざまな形での技術交流が行われていた可能性が明らかとなった。この時期はまさに仏像出現前夜ということになるが，そこには，実際に石材を巧みに扱う工人集団が複数存在し，その多様な技術を持ち寄っていたのである。今後は，舎利容器などの他の石製品や，さらに仏像の制作に携わる工人集団との関係も見据えて，当該期の技術的基盤を明らかにしていくことが課題となる。

参考文献

Bailey, H. W.（1978）Two Kharosthi Casket Inscriptions from Avaca. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1978-No. 1, 3-13.

Behrendt, K.（2004）*The Buddhist Architecture of Gandhāra.* Leiden-Boston : Brill.

Brown, R.（2006）The Nature and Use of the Bodily Relics of the Buddha in Gandhāra. In : Brancaccio, P. & K. Brhrendt（eds.）*Gandhāran Buddhism : Archaeology, Art, Text.* Vancouver, 183-209.

Callieri, P.（2007）Barikot, an Indo-Greek urban center in Gandhāra. In : Srinivasan, D. M.（ed.）*On the Cusp of an Era. Art in the pre-Kuṣāṇa world*. Leiden-Boston, 133-164 and Figs. 6.1-6.42.

Dar, S. R.（1979）Toilet Trays from Gandhara and Beginning of Hellenism in Pakistan. *Journal of Central Asia* vol. II（2）, 141-183.

Dar, S. R.（2007）Pathways between Gandhāra and north India during second century B. C.- second century A. D. In : Srinivasan, D. M.（ed.）*On the Cusp of an Era. Art in the pre-Kuṣāṇa world*. Leiden-Boston, 29-54.

サイフール ラフマン　ダール（桑山正進訳）（1981）ガンダーラの「化粧皿」とパーキスターンにおけるヘレニズムの始まり『佛教藝術』137, 58-85.

Dobbins, K. W.（1989）Buddhist Reliquaries from Gandhara. In : Handa, D. & A. Agrawal（eds.）*Ratna-Chandrikā. Panorama of Oriental Studies*. New Delhi, 105-124.

Erdosy, G.（1990）Taxila : Political History and Urban Structure. *South Asian Archaeology 1987*, 658-674.

Francfort, H. -P.（1976）Les modèles gréco-bactriens de quelques reliquaires et palettes à fards «gréco-bouddhiques». *AA* tome 32, 91-98.

Francfort, H. -P.（1979）*Les Palettes du Gandhāra. MDAFA* XXIII.

Francfort, H. -P.（1984）*Fouilles d'Aï Khanoum III. Le Sanctuaire du Temple à Niches Indentées. MDAFA* XXIII.

Ghosh, A.（1948）Taxila（Sirkap）, 1944-5. *Ancient India : bulletin of the Archaeological Survey of India* No. 4, 41-84.

Guillaume, O. et A. Rougeulle（1987）*Fouilles d'Aï Khanoum VII. Les Petits Objets. MDAFA* XXXI.

Hackin, J. J. Carl et J. Meunié（1959）*Diverses Recherches Archéologiques en Afghanistan (1933-1940). MDAFA* VIII.

堀晄・上山晶子（2013）ガンダーラ化粧皿の新資料『MIHO MUSEUM 研究紀要』13, 75-80.

堀晄・吉田邦夫・松永しのぶ・柏智久・水谷直樹（2006）ガンダーラ化粧皿の化学的分析『第 13 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会，28-34.

Jongeward, D., E. Errington, R. Salomon & S. Baums（2012）*Gandharan Buddhist Reliquaries*. Gandharan Studies volume 1, Seattle.

Kempe, D. R. C.（1986）Gandhara Sculptural Schist : Proposed Source. *Journal of Archaeological Science* 13, 79-87.

桑山正進（1987）『大唐西域記』（訳注）（『大乗仏典』中国・日本編 9）中央公論社.

桑山正進（2003）佛像出現ごろのタキシラ　層位と編年『東方学』第 106 輯，1-20.

Lo Muzio, C.（2013）Gandharan Toilet-Trays : Some Reflections on Chronology. *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 17, 331-340.

Marshall, J.（1951）*Taxila*. 3Vols, Cambridge.

Meunié, J.（1959）Qol-i Nâder, Une Petite Fondation Bouddhique au Kapiça. In : Hackin, J., J. Carl et J. Meunié, *Diverses Recherches Archéologiques en Afghanistan (1933-1940), MDAFA* VIII,

115-127.

宮治昭（1996）『ガンダーラ　仏の不思議』講談社選書メチエ 90, 講談社.

中村元編（2000）『ブッダの世界』学習研究社.

Neelis, J.（2007）Passages to India : Śaka and Kuṣāṇa migrations in historical contexts, In : Srinivasan. D. M.（ed.）*On the Cusp of an Era. Art in the pre-Kuṣāṇa world*. Leiden-Boston, 55-94 and Figs. 3.1-3.4.

Olivieri, L. M.（2000）Book Review : Vidula Jayaswal, *From Stone Quarry to Sculpturing Workshop. A Report on Archaeological Investigations around Chunar, Varanasi and Sarnath*, Agam Kala Prakashan, Delhi 1998, X-259 pp., 36figs. And 40pls. with b/w figs. ISBN 81-7320-033-5, *EW* 50(1-4), 581-583.

Pons, J.（2008）Gandharan Trays. In : *Gandhara, the Buddhist heritage of Pakistan : Legends, monasteries, and paradise*. Mainz, 78-79.

Rienjang, W.（2016）Some Observations on Partitioned Stone Vessels from Afghanistan. *Gandhāran Studies* 10, 93-102.

定方晟（1991）アヴァチャ王ヴィイダミトラ 32 年の刻文『東方』7, 123-129.

定方晟（1998）『異端のインド』東海大学出版会.

Salomon, R.（2007）Dynastic and Institutional Connections in the Pre- and Early Kusana Period : New Manuscript and Epigraphic Evidence. In : Srinivasan, D. M.（ed.）*On the Cusp of an Era. Art in the pre-Kuṣāṇa world*. Leiden-Boston, 267-286 and Figs. 10.1-10.4.

杉本卓洲（1984）『インド仏塔の研究 ―― 仏塔崇拝の生成と基盤 ――』平楽寺書店.

Taddei, M.（1966）A problematical toilet-tray from Uḍegrām. *EW* 16, 89-93.

Taddei, M.（1994）A Gandhāran stone lid and the chronology of the Tall-e Takht at Pasargadae. *South Asian Archaeology 1993*, 715-724.

田辺勝美（1985）『ガンダーラの貴婦人と化粧皿』古代オリエント博物館.

田辺勝美（2003）波羅蜜（多）・到彼岸の最古の造形と仏像の起源『古代オリエント博物館研究紀要』23, 75-150.

田辺勝美（2004）ガンダーラのいわゆる化粧皿の用途について『古代オリエント博物館研究紀要』24, 65-82.

田辺勝美（2006）『仏像の起源に学ぶ性と死』柳原出版.

田辺勝美（2007）ガンダーラ出土の石製半円形小皿について ―― いわゆる化粧皿説の再比定 ――『古代オリエント博物館研究紀要』27, 85-100.

田辺勝美（2011）ガンダーラ美術の図像学的研究（6）　一角仙人とガンダーラの所謂化粧皿 ―― ガンダーラの所謂化粧皿はガンダーラの在家仏教徒の所有物である ――『古代オリエント博物館研究紀要』31, 123-174.

田辺勝美（2015）テラコッタ製鋳型に関する一考察 ―― ガンダーラの所謂化粧皿の図像のモデルをめぐって ――『佛教藝術』340, 62-77.

Wilson, H. H.（1841）*Ariana Antiqua : A Descriptive Account of the Antiquities and Coins of*

Afghanistan, with a Memoir on the Buildings Called Topes, by C. Masson, ESQ. London.

図版出典

図 1：Francfort 1979 : Planches LIV～LVI（各断面図を再トレースし，反転復元）

図 2：個人蔵資料を筆者が撮影

図 3-1：Francfort 1979 : Planche V, Palette no. 9.

-2：Francfort 1979 : Planche XIV, Palette no. 28.

-3：Francfort 1979 : Planche XXXIII, Palette no. 67.

-4：Francfort 1979 : Planche XLI, Palette no. 82.

-5：Francfort 1979 : Planche XXXIX, Palette no. 79.

図 4：Marshall 1951 をもとに筆者作成

図 5：Francfort 1984 : Planches 13, 14（各図を再トレースし，反転復元）

（龍谷大学 龍谷ミュージアム）